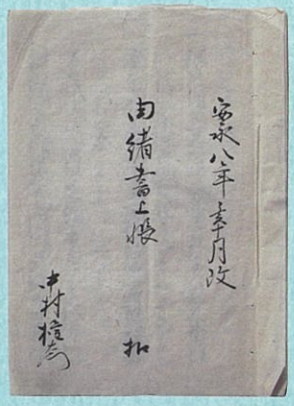
とこなめ陶の森 資料館 企画展

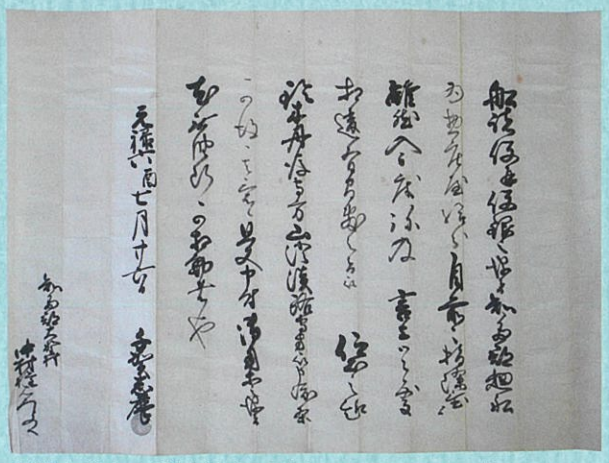
# 重要文化財「仏涅槃図」と中村家文書展

仏涅槃図南宋時代(12世紀末)



由緒書上帳(1779年)

バタン島漂流記(1668年)



千賀志摩守の書付(1693年)

## 2020年 1月11日[土] ～ 2月9日[日]

講演会

### 廻船惣庄屋中村家の役割と盛衰

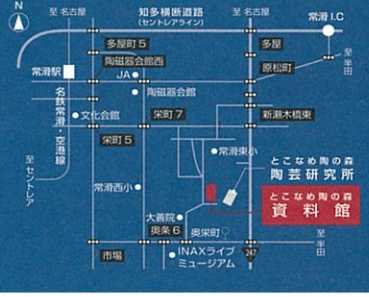
～ルーツ探求からみえる歴史のおもしろさ～

講　師　千賀哲郎
日　時　1月26日(日)10時～11時30分
会　場　資料館2階講座室
参加費　無料（予約不要）
問合せ　資料館 34－5290

千賀さんは廻船惣庄屋中村権衛門家の子孫の一人です。現在も中村家文書の研究を進め、先祖のルーツや功績を丹念に調べることで、尾州廻船の歴史を知る重要な手がかりやこれまで語られることのなかった郷土の事実を発見しています。

今回の講演会では中村家文書の解読からみえてくる地域研究の魅力を紹介します。


とこなめ陶の森 資料館
常滑市瀬木町4丁目203番地
TEL：0569-34-5290
FAX：0569-34-6979
www.tokoname-tounomori.jp

# 重要文化財「仏涅槃図」

重要文化財仏涅槃図は、二月十五日、古代インドの拘尸那竭羅城郊外の沙羅双樹の下で、釈迦が八十歳の生涯を終えて入涅槃する様子を表わしています。

宝床台には右手枕で目を閉じ、西向きで横になっている釈迦を他の人物よりもひときわ大きく描き、その周りには九人の弟子たちが泣き悲しんでいます。

向かって左には通天冠をつけて合掌する梵天、向かって右には柄香炉をもつ帝釈天が、それぞれ静かに佇ずみ、釈迦を供養しています。

宝床台の足元では、屈強な金剛力士と密迹力士が腰を落として悲嘆の様を露わにしています。弟子たちを取り囲む沙羅双樹は、悲しみのあまりに白色に変じて鶴林と化しています。

上空には釈迦の母、摩耶夫人の一行が、阿那律に先導されて忉利天から降臨する様子を描いています。

宝床台の前方には供養台が置かれ、台上には香炉を乗せて香木をたてています。その周りには、大鉢を掲げる純陀をはじめ、信者らが花や珊瑚で釈迦を供養し、阿闍世王と思われる王冠をつけた人物が、百獣の王である獅子とともに嘆き悲しんでいます。

右から二番目の沙羅双樹の右には、「明州江下周四郎筆」と墨書があり、中国浙江省の港湾都市として知られる寧波が「明州」と呼ばれていた南宋時代前期（12世紀末）に周四郎なる仏画師よって制作されたことを伝えています。

この仏涅槃図は、裏に天文二十一年（1552）当時、常滑市大野町の宮山に所在していた金蓮寺に伝来したもので、現在は石瀬にある中之坊寺の什物の一つとなっています。

# 廻船惣庄屋中村権右衛門家

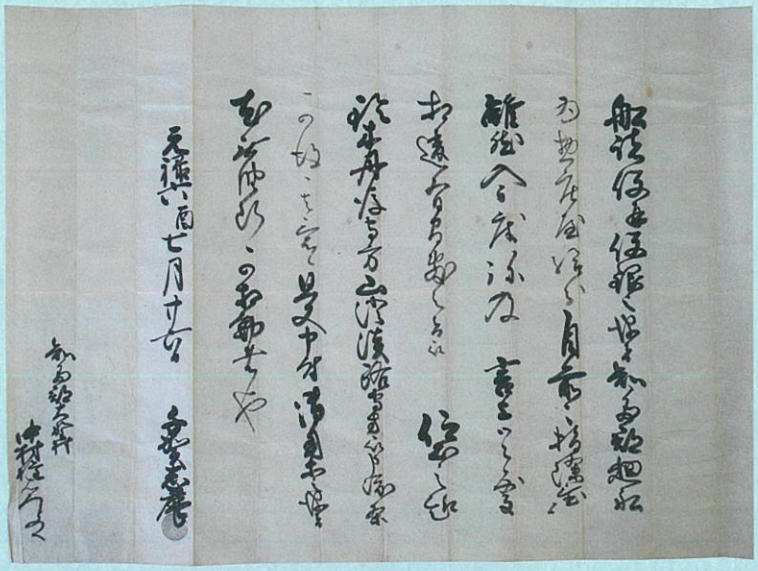
中村家は旧知多郡大野村で、尾張藩船奉行千賀志摩守のもと廻船惣庄屋を務めた家で、尾州廻船の盛衰を知ることができる貴重な記録が残されています。1988年に中村家から寄贈を受けた史料点数は355点で、ほぼすべてが江戸時代の近世史料です。文書史料は家の由緒や家格に関わるもの、難船の処理や廻船の管理、船役銀の徴収などがあり、いわゆる廻船惣庄屋としての職務に関わる史料が中心となっています。

現存する中村家の由緒書によれば、三河の武士の流れをくむとされます。初代は中村源右衛門（村田権右衛門）（1533－1585）ですが、五代以降は代々権右衛門を名乗っています。

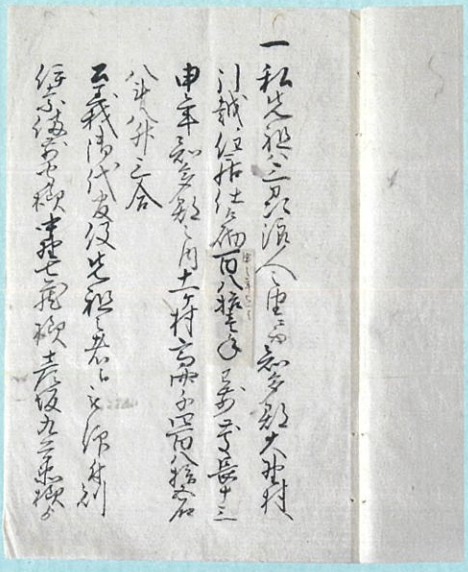
初代源右衛門は天正9年（1581）の春、織田長益（有楽斎）の大草城築城のため、普請奉行であった三州田原城主中村式部少輔舎弟伊織之輔の従者として大野へ来たとされています。しかし、中村式部少輔は由緒書にある田原の城主となった事実はないため、他の史料も含めて検証が必要です。その後、本能寺の変、関ヶ原の合戦を経た元和３年（1617）、尾張藩初代藩主徳川義直（1601－1650）の知多巡見で、日長浦で難風に遭遇し、湊へ船が着けられなくなりました。その危機を救ったのが二代中村源右衛門重直（1570－1640）で、船を数艘引き連れて救難に向い、大野湊へ無事に案内しました。中村家は公儀代官を務めた過去の経緯とこのときの功績が認められ、尾張藩から廻船惣庄屋を任せられました。

## 中村家権右衛門家家系図

- 天正13年7月23日（1585）　初代　源右衛門重政（52歳）
- 寛永17年10月6日（1640）　二代　源右衛門重直（70歳）
- 寛永4年3月25日（1664）　三代　源右衛門重延（46歳）
- 寛文8年7月5日（1668）　四代　宗左衛門重定（29歳）
- 宝永5年9月24日（1708）　五代　権右衛門重信（59歳）
- 明和3年10月22日（1766）　六代　権右衛門重秀（77歳）
- 寛政3年2月14日（1791）　七代　権右衛門叙秀（62歳）
- 文政3年6月25日（1820）　八代　権右衛門重興（69歳）
- 元治元年10月25日（1864）　九代　権右衛門房秀（82歳）
- 弘化3年3月12日（1846）　十代　権右衛門重教（32歳）
- 明治15年3月22日（1882）　十一代　権右衛門重固（60歳）
- 明治36年2月7日（1903）　十二代　権右衛門重義（57歳）



千賀志摩守から中村家にあてた船役銀に関する書付（1693年）

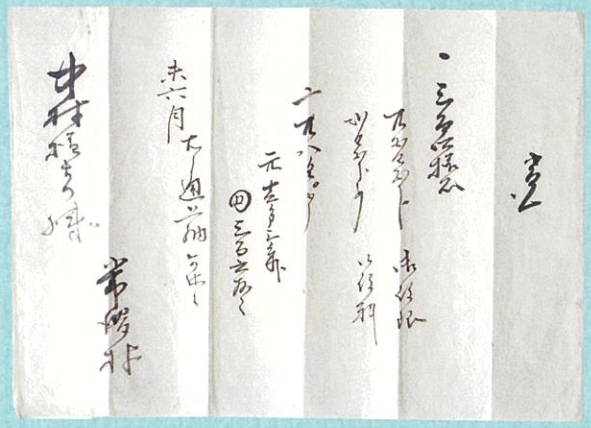


中村権右衛門家由緒書上帳（1779年）

こうして二代源右衛門以降、師崎（もろざき）に本拠を構える船奉行の千賀志摩守の配下に属し、江戸時代を通じて知多地方の船舶を管轄する尾張藩唯一の廻船惣庄屋を代々務めました。

廻船惣庄屋の仕事は、①非常の場合に軍用船や水主（かこ）などを集める事、②知多半島の船舶の増減を船奉行へ報告すること、③難破船があった場合の後始末、④異国船漂流の際は出張して、常備の船・水主を呼び集めること、⑤その他、廻船の積荷などに関する問題や運賃等の交渉を行うことです。

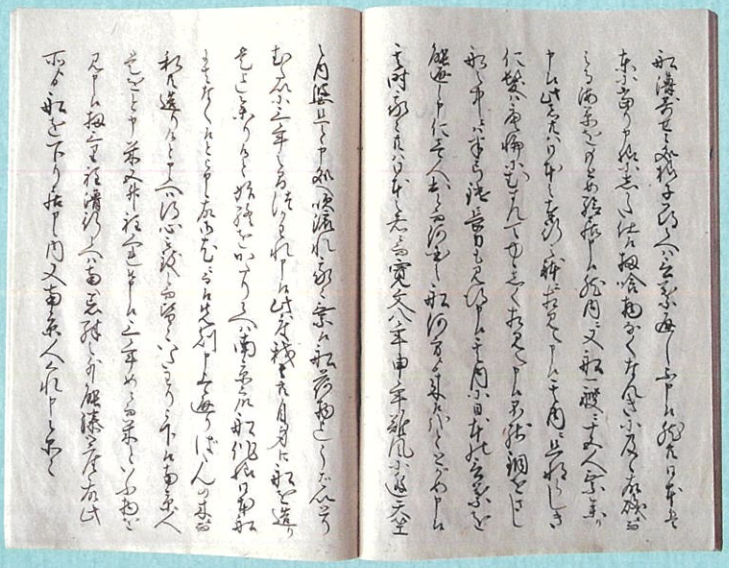
本企画展では、これまで未発表となっていた史料も合わせて展示します。中村家が大切に伝えた古文書を通じて、これまでに語られることのなかった大野の歴史や尾州廻船の歴史をひもとくきっかけになれば幸いです。



船役銀上納覚（常滑村→中村家）

# バタン島漂流記

廻船惣庄屋の仕事がよくわかるものとして、『寛文（かんぶん）八年申九月大野村木ノ下町権田孫左衛門（ごんだまござえもん）船婆鞀國江吹流候口書一件（ばたんこくえふきながれそうろうくちがきいっけん）』（以後『バタン島漂流記』）があります。この文書は、寛文8年（1668）に江戸から大野へ帰る途中で難風（暴風）に遭い、フィリピン最北端のバタン諸島へ遭難した文書です。表題にある口書とは、裁判における供述や主張、取調べに対する返答を記述した調書です。当史料は『尾州大野村船漂流一件』、『馬丹島（ばたんとう）へ流れ候水主（かこ）口書』などの類本も存在しており、江戸時代の人々にとっても関心の高い記録だったと考えられます。詳細を調べると、内容は多くの部分が共通していますが、大野村に帰国する道中で与えられた物品の点数やバタン島の言葉や風習に違いがみられます。このことから『バタン島漂流記』は読み物としての面白さだけではなく、尾張藩内で起きた海に関わる事件、バタン諸島の暮らしが記載された最も古い記録であり、大変貴重なものです。



バタン島漂流記（1668年）

**絶賛発売中**

『バタン島漂流記』の全文が収録されています

**700円**